Annual Bulletin of Institute of Psychological Studies.
Showa Women's University, 2012, Vol. 14, 57-68.

論　文

高齢者の生への価値観と死に対する態度[1)]

田口　香代子・三浦　香苗

Value of life and attitudes towards the death of elderly people

Kayoko TAGUCHI and Kanae MIURA

A questionnaire package consisting of the Purpose-In-Life Test (PIL), Death Attitude Profile (DAP) that includes four dimensions: Fear of Death/Dying, Approach-Oriented Death Acceptance, Neutral Acceptance, and Escape-Oriented Death Acceptance, as well as the Satisfaction with Life Scale (SWLS) was administered to examine the relationship between the value of life and attitudes towards the death of elderly people. Valid data were obtained from 100 males and 100 females over 65 years of age. The results were as follows: (1) Fear of Death and Dying in the high PIL group was significantly higher than in the mid and low PIL groups. (2) The score of Approach-Oriented Death Acceptance in females was significantly higher than in males. (3) There were no significant differences in Neutral Acceptance. (4) In regard to Escape-Oriented Death Acceptance score, the highest was the low PIL group and the lowest was the high PIL group. These findings show a relationship between the value of life and attitudes towards the death of elderly people.

Key words : the elderly（高齢者）, value of life（生への価値観）, purpose-in-life test（PILテスト）, attitudes towards death（死に対する態度）

Ⅰ．問題と目的

わが国は「本格的な高齢社会」（内閣府，2011）を迎えている。平成23年度版高齢社会白書（内閣府，2011）によると、全人口に占める65歳以上の人口の割合（高齢化率）は23.1％となり、4人に1人が高齢者という社会に近づきつつある。また、平均寿命は、平成21年には男性79.59年、女性86.44年と高齢になり、今後も伸び続けることが予想されている。高齢化率の増加や高齢期の長期化に伴い、高齢者の心の健康の維持・促進はこれまで以上に社会全体に関わる問題になってきている。

高齢期は生の最終段階であり、同時に自身の死に直面する時期である。Erikson, Erikson, & Kivnick（1986）らは、死も老年期の一構成要素として統合されなければならないと述べている。つまり、死に対してどのような態度を持っているかということは、高齢者の心の健康の維持・促進に関わる重要なテーマであるといえる。また、近年、医療技術の向上に伴い、延命治療やターミナルケアがなされ、死を迎える場所についても、自宅、病院、各種施設など多様化してきている。現代は、死に関する時代の変革期であるといえ、改めて高齢者の死に対する態度の実態を明らかにすることが不可欠である。

死に対する態度の研究は、当初は死の不安や恐怖に関する研究が進められ、Templer（1970）の死の不安尺度（Death Anxiety Scale）が開発された。その後、Gesser, Wong, & Reker（1987）の死に対する態度尺度（Death Attitude Profile）や、Spilka, Minton, & Sizemore（1977）による死観（death perspective）を測定する尺度が開発され、死の不安や恐怖以外の多側面についても検討されるようになってきている。

国内では、‘死に対する態度’（針金・河合・増井・岩佐・稲垣・権藤・小川・鈴木，2009；羽坂・岡本，2006；橋本・中村・柳井・横内・鶴

田，1993；河合・下仲・中里，1996；丹下，1999）や、‘死生観’（森田，2007；丹下，1995；辰巳，2000）、‘死観’（金児，1994）、‘死に対する意味づけ’や‘死の意味づけ’（石坂，2009；川島，2005）といった概念による、死に対する態度や意識の研究が行われている。

諸外国と比較すると、わが国の高齢者の死の不安や恐怖が高いことが示唆されているが（河合他，1996）、一方で、高齢者の死の恐怖は低い、または恐怖がないという報告もある（青木，2000；荒井，1994；羽坂・岡本，2006；橋本他，1993）。

年代による比較では、堀（1996）は、高齢者は大学生よりも死の恐怖を感じる割合が低いことを報告している。同様に、小谷（2004）も40代から70代を対象とした調査の結果、年齢が上昇するにつれて、死を恐れない人が増えると述べている。杉山（1997）も16歳から87歳までを対象とした調査の結果、死の不安は、50歳以上と50歳未満とでは後者が有意に低いと報告している。

性差の検討も行われてきている。男性は死を避け、考える頻度が少ないが、女性は死を受け入れる傾向があり、肯定的な意味づけをするなど接近的姿勢をとるという報告がある（針金他，2009；石坂，2009；森末，2003）。また、女性は死に対しても男性より楽観的な見方をする（李，1990）という報告がある一方で、死の不安や恐怖は、男性よりも女性の方が高いという報告（針金他，2009；金児，1994；辰巳，2000）や、性差がみられないという報告もあり（河合他，1996；杉山，1997）、見解の不一致が認められる。

その他、様々な要因との関連が検討されており、針金他（2009）は、死に対する態度の下位尺度と、性・年齢・配偶者との同居の有無、過去1年間における近親者との死別経験、主観的健康感、精神的健康との間に有意な関連を認めている。河合他（1996）は、死の不安や恐怖と関連する要因として、年齢、経済状態、配偶者の有無、子ども数を挙げている。また、死の受容に関連する要因として、年齢、学歴、健康状態、経済状態、信仰の他に、配偶者、孫などの家族やペットの有無、死別体験を報告しており、多様な要因が関連していることが明らかになっている。

死に対する態度の関連要因については結果が様々であり、見解の不一致が認められることが少なくない。こうした見解の不一致について、河合他（1996）は、測定する次元や使用尺度が異なるなど、方法論の問題や対象者の年齢幅が異なっていることについて指摘している。また、調査対象者は中学生・高校生、看護学生、大学生、中高齢期までと幅広いが、高齢者を対象とした実証的研究は十分とはいえず（川島，2005；辰巳，2000）、高齢期における死に対する態度を把握するためには、更なる知見の蓄積が必要といえる。

また、死は生の延長上にあるといえ、生に関する視点を含めて論ずることが必要と考えられるが、これまでに死に対する態度と生との関連をみた研究は少ない。辰巳（2000）は、死の不安が高いこととQOL（Quality of Life：生命や生活の質）の低さの関連を示唆した。小谷（2004）は、死を恐怖と思わない人は、生活満足度が高い人と低い人のどちらにも多くみられると指摘し、生活満足度が低く、死を恐怖と思わない人については、背景に現実逃避の意識が働いていると推察している。これらは、生の視点を含めた死に対する態度の検討であるといえるが、生への価値観や生き方との関連を検討した研究はこれまで殆ど見られない。

そこで本研究では高齢者の生き方、つまり生への価値観を把握し、それが死に対する態度とどのように関連するかを検討する。このことにより、死への恐怖が高い場合の介入策を講じることが可能と考えられる。生への価値観については、尺度を用いた量的な調査の他、文章完成法や、自由記述による人生の目標に関する質的な調査を行い、より実態に迫った生への価値観の検討を行う。また、生き方は主観的幸福感と関連することが予測されるため、生への価値観と主観的幸福感との関連についても検討する。

Ⅱ．方　法

1．調査手続きおよび調査対象者

2011年4月にリサーチ会社への委託によるウェブ調査を実施した。先行研究から、配偶者の有無や、近親者との死別体験が死に対する態度の関連要因であることを考慮し、調査対象者は65歳以上の有配偶者とした。また、高齢期における配偶者との死別は非常にストレスフルであり（Homes

& Rahe, 1967)、死別後の心理過程では生前の夫婦関係によって様々な精神的苦痛を経験することが明らかにされているが（田口, 2002)、これらは生き方にも少なからず影響を及ぼし、精神的健康を低下させると考えられたため、有配偶者に限定することとした。また、調査の内容から東日本大震災の影響をかんがみ、東北地方および関東地方の一部の地域には配信を行わなかった。

調査対象者の選定については、リサーチ会社がアンケートモニターの中から、性別・地域・年齢に関して調査の条件に合致する者を抽出した。さらに、その中からランダムに抽出された1,300名の配信対象者に質問紙が配信された。質問紙への回答は先着順に行われ、必要数を回収した時点で終了した。なお、回答者には謝礼としてリサーチ会社のポイントが付与された。

質問紙の冒頭では、調査目的と、質問には死に関する内容が含まれていることについて説明した。さらに調査への参加は自由意志に基づき、回答を拒否することができること、回答中であっても参加の中止は随時可能であること、結果は個人が特定されない形で処理されることを伝えた。これらに同意し、かつ、配偶者がいると回答した男性100名、女性100名の回答を分析対象とした。

業者委託であったため回答に欠損はなく、回収率は100％であった。対象者の年齢は65-79歳に分布し、平均年齢は71.03歳（SD＝3.91）であった。対象者の職業の有無と主観的健康感をTable 1に示す。男性の約7割と女性の約9割が無職であった。健康状態について“非常に良い”、“どちらかといえば良い”と回答した者は、男女共に64.0％であった。“どちらかといえば悪い”“非常に悪い”と回答した者は、男性は17.0％、女性は15.0％にとどまり、過半数は健康状態が良好な者であった。

Table 1　調査対象者の属性（N＝200）

属性	男性（N＝100）	女性（N＝100）
職業		
有職	23(23.0)	6(6.0)
無職	74(74.0)	89(89.0)
その他	3(3.0)	5(5.0)
主観的健康感		
非常に良い	16(16.0)	8(8.0)
どちらかといえば良い	48(48.0)	56(56.0)
どちらともいえない	19(19.0)	21(21.0)
どちらかといえば悪い	16(16.0)	13(13.0)
非常に悪い	1(1.0)	2(2.0)

注）括弧内の数値は％

2．調査内容

(1) フェイスシート

年齢、性別、職業の有無、主観的健康感、配偶者の有無について回答を求めた。

(2) 人生における意味・目的意識

生への価値観の指標として、PILテスト日本語版（Purpose-in-life Test：以下、PILとする）（PIL研究会, 1993a）を使用した。なお、版権所有者にはウェブ調査で使用することを報告し、使用部数分の料金を支払った。

このテストはPart-A、Part-B、Part-Cから構成されている。Part-Aは“私はふだん退屈しきっている”、“生きていくうえで私にはなんの目標も計画もない”などの項目を含む20項目について、7件法で回答を求めた。Part-Aは、ほぼ1次元の尺度であることが確認されており（PIL研究会, 1993b)、得点が高いほど人生における意味・目的意識が明確であることを示す。

Part-Bは13項目の文章完成法によって構成されている。そのうち、生き方や生への価値観を捉えることが可能と考えた5項目（“私の人生は”、“私ができたらと思うことは”、“私の人生の本当の目的は”“私が今、成しとげつつあるのは”、“私にとって生活のすべては”）を使用し、回答を求めた。

Part-Cは1項目の自由記述である。原文は人生における目的・目標・希望を問う内容になっているが、より具体的な回答を得ることが可能と思われる人生の目標に質問を絞った。原文は一部修正し、“あなたは生きていくこと（人生）にどんな目標をもっていますか。書ける範囲で結構ですので、目標の内容を具体的に教えてください”と教示した。

(3) 死に対する態度

Gesser, Wong & Reker（1987）が開発し、河合他（1996）が日本語版を作成した、死に対する態度尺度の短縮版（Death Attitude Profile：以下、DAP短縮版とする；針金他, 2009）を使用した。この

尺度の信頼性、妥当性はオリジナル版に近い性質を示しており、短縮版として使用可能であることが確認されている（針金他, 2009）。「死の恐怖」、「積極的受容」、「中立的受容」、「回避的受容」の4下位尺度、各3項目からなる12項目について、「1. そう思わない」～「5. そう思う」の5件法で回答を求めた。各下位尺度の得点が高いほど、下位尺度が測定する態度をもつ傾向が強いことを示す。この尺度は、死に対する態度の多側面を捉えることが可能な尺度である。「死の恐怖」（“苦しんで死ぬのがこわい”“自分自身の死を予想すると不安になる”）は、死の否定的側面を測定する指標で、死そのものに対する恐怖と死に方に対する恐怖を測定する。「積極的受容」（“私は死後の世界を楽しみにしている”“死は、永遠の幸福な場所への道だと思う”）は、死後の世界への期待から死を受容する態度を測定する。「中立的受容」（“私は死を恐れないし、歓迎もしない”“私たちすべては死ななければならないという事実をしかたがないとあきらめている”）は、死を客観的に認識し、死の必然性を受容する態度を測定する。「回避的受容」（“私は生きることにうんざりしている”“私の人生を延ばすことにどんな目的も意味もみつからない”）は、現世の否定的状況からの回避を可能にするものとして死を受容する態度を測定する（針金他, 2009）。

(4) 主観的幸福感

人生における意味・目的意識と主観的幸福感との関連を検討するため、Satisfaction With Life Scale（以下、SWLSとする）（Diener, 2004）を使用した。なお、Dienerのホームページ上には日本語版が掲載されているため、これを使用した。この尺度は、“ほとんどの面で、私の人生は私の理想に近い”、“私の人生は、とてもすばらしい状態だ”などを含む5項目から構成されており、得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示す。各項目について「1. 全くそうでない」～「7. 非常にそうだ」の7件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結　果

1. 尺度の検討

(1) PIL Part-A

PIL Part-Aの信頼性を検討するため、Cronbachのα係数を算出した結果、α＝.91と十分な値が得られた。PIL研究会（1993）においてもα＝.896と十分な値が得られていることから、同様の結果が得られたといえる。

(2) DAP短縮版

次に、DAP短縮版の信頼性を検討するため、各下位尺度についてCronbachのα係数を算出したところ、「死の恐怖」はα＝.70、「積極的受容」はα＝.79、「中立的受容」はα＝.44、「回避的受容」はα＝.66であった。針金他（2009）によると、「死の恐怖」α＝.60、「積極的受容」α＝.59、「中立的受容」α＝.52、「回避的受容」α＝.54と報告されている。本研究では「中立的受容」の値が低い結果となったが、河合らの値と大差がなく、「中立的受容」以外の3下位尺度は、河合らが報告した値を上回っているため、分析に使用可能であると判断した。

(3) SWLS

SWLSの信頼性を検討するため、Cronbachのα係数を算出した結果、α＝.89と十分な値を示した。

2. 対象者の群分け

PIL Part-Aの得点を元に、既存の判定表に従い、調査協力者の人生における意味・目的の程度について、低・中・高の判定を行った。判定は年齢に応じて異なるため、判定基準をTable 2に示す。判定の結果、人生における明確な意味・目的の欠如を示唆する低判定群31名を不明確群、人生における意味・目的がいくぶん不明確であることを示唆する中判定群146名を不明確傾向群、人生における明確な意味・目的の存在を示唆する高判定群23名を明確群とした（Table 3）。χ^2検定の結果、人数の偏りは有意であり（$\chi^2 = 142.90$, $df = 2$, $p = <.001$）、不明確傾向群が多く、不明確群および明確群は少なかった。各群における男女の人

Table 2　年齢に応じたPIL PartAの得点の判定基準

	20～79	80～89	90～109	110～119	120～129	130～140
65～74歳	低	低	中	中	高	高
75歳以上	低	中	中	中	中	高

（PIL研究会（編）（1993b）. PILテスト日本語版マニュアル システムパブリカより一部引用）

Table 3　年代別にみたPIL PartAの各群における男女数

	低群（＝不明確群）		中群（＝不明確傾向群）		高群（＝明確群）	
	男（N＝13）	女（N＝18）	男（N＝76）	女（N＝70）	男（N＝11）	女（N＝12）
65～74歳	11	17	48	48	11	12
75～79歳	2	1	28	22	0	0

数についてχ^2検定を行ったところ、人数に偏りはみられなかった（$\chi^2 = 0.58$, $df = 2$, *n.s.*）。

3．人生における意味・目的意識と死に対する態度および主観的幸福感との関連

先行研究において死に対する態度と性差との関連が検討されているため、性別の要因も考慮し、人生における意味・目的意識の程度および性別と、死に対する態度、主観的幸福感との関連を検討した。PIL Part-Aの3群(3)×性別(2)の2要因の分散分析行った結果、いずれの尺度においても交互作用は認められなかった（Table 4）。なお、分析の際は、尺度の項目平均値を算出し、尺度得点・下位尺度得点とした。

(1) 死に対する態度の検討

「死の恐怖」では、群の主効果のみ有意であった（F (2,194) ＝6.14, p<.01）。TukeyのHSD法（5％水準）による多重比較を行ったところ、明確群は不明確傾向群・不明確群よりも死の恐怖が低いことが示された。明確群の得点は2.58で、「2. あまりそう思わない」と「3. どちらともいえない」との間に位置し、死の恐怖は低かった。また、不明確傾向群・不明確群の得点も、それぞれ3.08、3.41であり、「3. どちらともいえない」と「4. まあそう思う」との間に位置していることから、両群の死の恐怖は高くないことが示された。

「積極的受容」では、性別の主効果のみ有意であり（F (1,194) ＝4.29, p<.05）、女性の方が男性よりも積極的受容傾向が有意に高いことが示された。しかし、男性の得点は2.28、女性は2.53であり、共に「2. あまりそう思わない」と「3. どちらともいえない」との間にあることから、両者とも死後の世界への期待から死を受容する態度は低いことが示された。

「中立的受容」では群間に有意な差がみられず、人生における意味・目的意識の程度および性別と、死の必然性を受容する態度には関連がないことが分かった。

「回避的受容」では群の主効果のみが有意であった（F (2,194) ＝27.13, p<.001）。TukeyのHSD法（5％水準）による多重比較を行ったところ、明確群の回避的受容傾向は最も低いという結果が得られた。明確群の得点は1.59で、「1. そう思わない」と「2. あまりそう思わない」との間に位置していた。しかし、不明確傾向群・不明確群の得点も、それぞれ2.08、2.80であり、共に「2. あまりそう思わない」と「3. どちらともいえない」との間にあることから、どの群においても総じて、現世からの回避を期待して死を受容する態度は低いことが示された。

Table 4　PIL Part-Aの3群と性別の分散分析結果

	PIL Part-Aの3群					性別		
	明確群	不明確傾向群	不明確群	F値	多重比較	男性	女性	F値
死の恐怖	2.58(0.88)	3.08(0.81)	3.41(0.88)	6.14**	不明確，不明確傾向＞明確	2.98(0.85)	3.17(0.85)	0.78
積極的受容	2.49(0.89)	2.42(0.84)	2.29(0.81)	0.76		2.28(0.85)	2.53(0.81)	4.29*
中立的受容	3.59(0.92)	3.69(0.69)	3.58(0.54)	0.44		3.76(0.65)	3.57(0.73)	1.66
回避的受容	1.59(0.49)	2.08(0.60)	2.80(0.74)	27.13***	不明確＞不明確傾向＞明確	2.05(0.68)	2.22(0.69)	0.01
SWLS	5.50 (0.84)	4.64(0.95)	3.17(1.16)	41.06***	明確＞不明確傾向＞不明確	4.45(1.11)	4.57(1.20)	0.01

注）括弧内の数値は*SD*

*p<.05，**p<.01，***p<.001

(2) 主観的幸福感の検討

主観的幸福感は群の主効果のみ有意であった（$F(2,194)=41.06$, $p<.001$）。TukeyのHSD法（5％水準）による多重比較を行ったところ、明確群は主観的幸福感が最も高く、不明確群は主観的幸福感が最も低いという結果が得られた。明確群の得点は5.5で、「5. ややそうだ」と「6. そうだ」との間に位置していた。不明確傾向群の得点は4.6で、「4. どちらでもない」と「5. ややそうだ」の間に位置していた。不明確群の得点は3.2で「3. あまりそうでない」と「4. どちらでもない」との間に位置していた。すなわち、明確群の主観的幸福感は高めで、不明確傾向群はやや高く、不明確群はやや低いことが示された。

4．人生における意味・目的意識と目標内容

PIL Part-Cで得られた回答は、目標の内容を包括的に分類することが可能な（James & Jeffrey, 1996）、Ford & Nicholsの分類法（Ford, 1992）を基準に分類を行った。この分類法では、目標は個人内のものであるか、個人と環境間に関するものであるかという観点から分類され、「情緒的目標」、「認知的目標」、「主観的体制化に関する目標」、「自己主張的な社会的関係に関する目標」、「統合的な社会的関係に関する目標」、「課題に関する目標」の6つのカテゴリーが設けられている。各カテゴリーの内容はTable 5に示す。本研究では、これらに「目標なし」を加えた全7カテゴリーによる分類を行った。

分類は、第一著者と心理学を専攻する大学院生との2名で行い、判定が一致しない場合は、協議の上、一致を求めた。また、1名の回答中に目標が複数含まれ、それぞれが同じカテゴリーに分類された場合、目標数は1とした。「目標なし」の18名と目標に関する記述内容が確認できなかった2名を除く180名の目標数は計232個、平均目標数は1.29個であった。

目標が複数あった者については無作為抽出によって目標を1個に絞り、各カテゴリーへの分類を行った結果、度数が15未満となった「主観的体制化」（度数3）と「課題」（度数13）のカテゴリーを統合し、「その他」とした。次に、PIL Part-Aの3群と目標内容との関連を検討するため、直接確立計算を行ったところ、人数の偏りは有意であった（両側検定：$p=.004$）。残差分析を行った結果、不明確群は「目標なし」が多く、不明確傾向群では少ないことが示された。なお、明確群では「目標なし」に該当がなかった。また、その他の目標内容に関するカテゴリーについては差が認められなかった（Table 6）。

5．人生に対する態度

調査対象者が、自身の人生に対してどのような態度を持っているかを検討するため、PIL Part-Bの5項目のうち、“私の人生は”について回答の分析を行った。

分析手順として、はじめに、記述内容についてPositive（以下、Pとする）、Negative（以下、Nと

Table 5　目標の分類

カテゴリー	内　　容
個人内の目標	
①情緒的目標	楽しみ、平穏・安定、幸福、身体的感覚における満足や喜びの経験、身体的ウェルビーイング
②認知的目標	探求、理解、知的想像力、肯定的自己評価
③主観的体制化に関する目標	連帯・調和の感覚を深く経験すること、人・自然・大いなる力との一体感、並はずれて機能する超越した状態の経験
個人と環境間の目標	
④自己主張的な社会的関係に関する目標	個性、自己決定、優越、他者から承認・支援を得るなどの資源獲得
⑤統合的な社会的関係に関する目標	所属・親密さ・つながり、社会的責任、公平・公正、他者への承認・支援などの資源供給
⑥課題に関する目標	習得・熟達、創造的活動、管理、物質の獲得、安全性の確保

（Ford, M.E.（1992）. Motivating humans: goals,emotions,and personal agency beliefs. SAGE.より一部引用）

Table 6　PIL Part-Aの群別の目標

	目標なし	情緒	認知	自己主張的社会関係	統合的社会関係	その他	計
明確群	0（0.0）	6(26.1)	3(13.0)	4(17.4)	8(34.8)	2(8.7)	23(100)
不明確傾向群	8（5.6） -2.8**	54(37.5)	12(8.3)	12(31.3)	45(31.3)	13(9.0)	144(100)
不明確群	10(32.3) 4.9***	8(25.8)	0（0.0）	2（6.5）	10(32.3)	1(3.2)	31(100)
計	18（9.1）	68(34.3)	15（7.6）	18（9.1）	63(31.8)	16(8.1)	198(100)

注）数値は度数、群の下段の数値は調整された残差、括弧内の数値は各群の人数に対する割合を示す。
p<.01，*p<.001

する)、Neutral（以下、Neuとする）の判定を行った。Pは人生に対する肯定的評価や意味づけ、主体的または前向きな姿勢、及びものごとへの積極的関与の存在を示す。Nは人生に対する否定的評価や意味づけ、非主体的な姿勢、及びものごとへの関与が消極的であることを示す。Neuは内容が中立的または説明的、PとNの混在、及びPやNが不明確であることを示す。なお、“昔は良かったが、今は辛い”のように時間の経過に伴ったPとNの両方を含む記述については、現時点の状態や気持ちについて判定を行った。

次に、目標の分類基準として使用したFord & Nicholsの分類法（Ford, 1992）に従って、PとNのそれぞれについて記述内容の分類を行った。Ford & Nicholsの分類法（Ford, 1992）は、人の行動を方向づける、‘個人内’および‘個人と環境’という基本的な要素から構成されていることや、感情、認知といった、態度の基本的な要素となるカテゴリーが含まれているため、目標の内容分類に限らず、広く人の態度を捉える枠組みとして使用することが可能と判断し、分析に用いた。なお、1名分の記述内容が複数のカテゴリーを含む場合もあるため、結果は度数で表した。

判定・分類は、第一著者と心理学を専攻する大学院生との2名で行い、判定が一致しない場合は、協議の上、一致を求めた。不一致となったものについては、第一著者と第二著者で話し合いの上、決定した。回答が不明瞭、または刺激文に対する回答内容が確認できなかった2名を除く、198名を分析対象とした。

P・N・Neuの判定結果を元に、PIL Part-Aの3群との関連を検討するため、直接確立計算を行った結果、人数の偏りは有意であった（両側検定：p＝.000）。残差分析を行ったところ、明確群と不明確傾向群ではPが多かった。不明確群ではNが多いことが示され、群による差が認められた（Table 7）。

各群におけるPの記述内容を各カテゴリーに分類した結果、「主観的体制化」と「課題」には該当がなく、「情緒」、「認知」、「自己主張的社会関係」、「統合的社会関係」に「その他」を加えた全5カテゴリーに整理された。結果をFigure 1に示す。なお、文中に示す具体的な記述内容は、プライバシー保護の観点と、理解しやすさを考慮し、一部表現を変更した。

明確群と不明確傾向群には共に「情緒」、「認知」、「自己主張的社会関係」、「統合的社会関係」の4カテゴリーが含まれており、‘個人内’と‘個人と環境間’との両方に関するポジティブな評価が認められた。一方、不明確群では‘個人内’の「情緒」、「認知」の2カテゴリーのみが示された。

Table 7　PIL Part-Aの群別のSCT判定

	Positive	Neutral	Negative	計
明確群	21(91.3) 2.3*	2（8.7）	0（0.0）	23(100)
不明確傾向群	111(76.6) 2.7**	25(17.2)	9（6.2） -4.5***	145(100)
不明確群	9(30.0) -5.4***	5(16.7)	16(53.3) 7.3***	30(100)
計	141(71.2)	32(16.2)	25(12.6)	198(100)

注）数値は度数、群の下段の数値は調整された残差、
括弧内の数値は各群の人数に対する割合を示す。
*p<.05，**p<.01，***p<.001

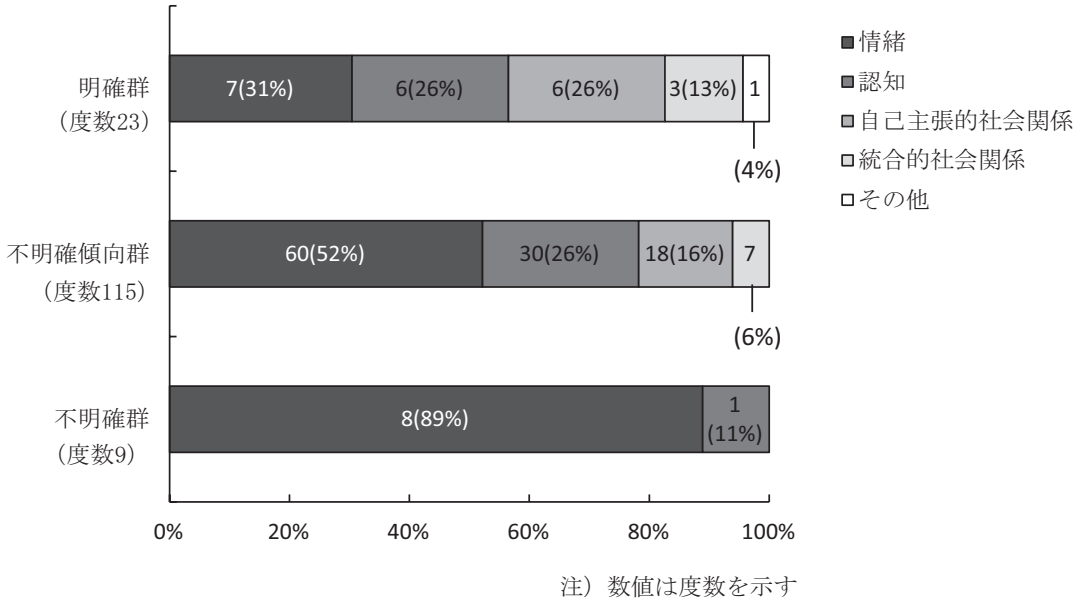

Figure 1　PIL Part-Aの群別にみたPositive判定の内容

カテゴリーの特徴をみると、明確群では‘個人と環境間’における「自己主張的社会関係」と「統合的社会関係」の割合が不明確傾向群よりも高く、特に「統合的社会関係」については、不明確群の6％に対して、約2倍にあたる13％を占めていた。「自己主張的社会関係」は、社会的関係における自己の維持と促進を意味しており、明確群では、“自分の意思である程度のことはやってきている”、“存在感”などの記述がみられた。「統合的社会関係」は、他者や集団とのウェルビーイングの維持と促進を意味しており、明確群では、“家族を得ることができた”“（自分のことよりも）先に人のためを考えている”といった記述がみられた。不明確傾向群では「情緒」が占める割合が高く、全体のほぼ半分を占めていた。「情緒」は、人が経験したいと思う感情や情動であり、“楽しかった”、“平凡だが面白い”といった記述が確認された。不明確群では、‘個人内’の「情緒」と「認知」のみが確認された。全体の約9割を「情緒」が占めていることが特徴的で、「認知」の割合は他の2群の半分以下にあたる11％にとどまった。「認知」は、探究、理解、知的想像力、肯定的自己評価を含み、人が構築または維持を望む知的な領域に関連しているが、各群においては“充実そのものだ”（明確群）、“有意義だと思う”（明確群、不明確傾向群）、“自分なりに精いっぱい生きた”（不明確群）といった記述がみられた。

これらの結果から、明確群では‘個人と環境間’の「自己主張的社会関係」と「統合的社会関係」、不明確傾向群および不明確群では‘個人内’の「情緒」に関するポジティブな評価や態度の存在が明らかになった。

Nの記述については、明確群には該当がなく、人生を否定的に捉えていないことが示された。不明確傾向群と不明確群の記述内容を分類したところ、「その他」には該当がなく、両群共に「情緒」、「認知」、「自己主張的社会関係」、「統合的社会関係」の4カテゴリーが含まれており、‘個人内’と‘個人と環境間’との両方に関するネガティブな評価が認められた。（Figure 2）。

カテゴリーの特徴をみると不明確傾向群では‘個人内’の「認知」の割合が最も高く、全体の約7割を占めており、“もっと努力しなくちゃ”、“悔恨が多い”といった記述がみられた。不明確群では‘個人内’の「情緒」が不明確傾向群の約3倍（31％）、‘個人と環境間’の「自己主張的社会関係」が2倍以上（25％）の割合を占めていた。「情緒」では“むなしい”、“苦労の人生”、「自己主張的社会関係」では、“流れに流されてばかり”“配偶者の言いなりだった”といった記述がみられた。

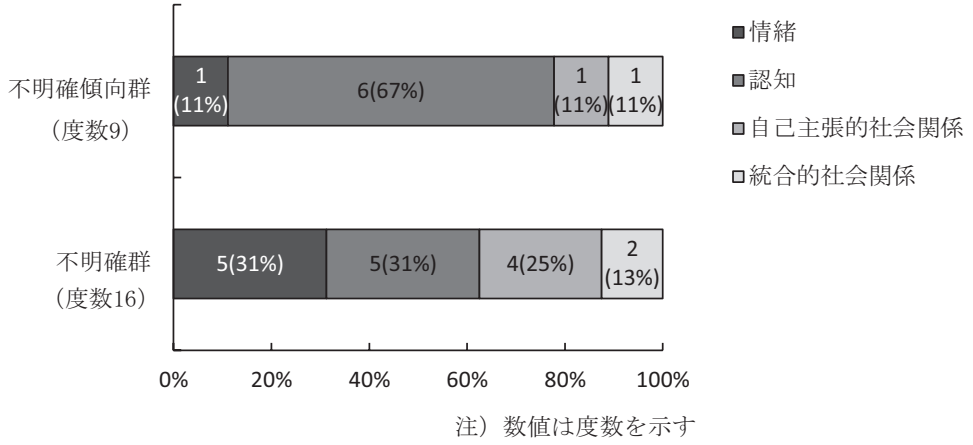

Figure 2　PIL Part-Aの群別にみたNegative判定の内容

これらの結果から、不明確傾向群では‘個人内’の「認知」、不明確群では‘個人内’の「情緒」と‘個人と環境間’の「自己主張的社会関係」に関するネガティブな評価や態度の存在が明らかとなった。

Ⅳ．考　察

1．人生の意味・目的意識および性別と死に対する態度・主観的幸福感

人生の意味・目的の明確さが異なるPIL Part-Aの3群と性別によって、死に対する態度の4下位尺度および主観的幸福感に差がみられるか検討したところ、PIL Part-Aの3群による差がみられたのは死に対する態度のうちの「死の恐怖」、「回避的受容」および主観的幸福感であった。

明確群は「死の恐怖」と「回避的受容」が低く、主観的幸福感が高かった。すなわち、人生における意味・目的意識が明確な人は死の恐怖は低く、現世からの回避を期待せず、幸福感が高いことが示された。生への価値観が明確であり、生が充実していることが人生が終わることへの不安を低める可能性があると推察される。不明確傾向群は明確群よりも「死の恐怖」と「回避的受容」が高く、主観的幸福感が低いことが示された。すなわち、人生における意味・目的意識がいくぶん不明確な人は、明確な人よりも死の恐怖が高く、現世からの回避を期待し、主観的幸福感が低いことが示された。不明確群は、明確群よりも「死の恐怖」が高かった。また、他の2群よりも「回避的受容」が高く、主観的幸福感が低かった。すなわち、人生における意味・目的意識が欠如している人は、現世の回避を期待し、主観的幸福感が低いといえる。現世に意味を見出すことができず、生の充実を感じられないため、人生が終わることへの恐怖が高まる可能性があると推察された。

しかし、得点から特徴をみると不明確傾向群と不明確群においても「死の恐怖」と「回避的受容」は高いとはいえないことが示された。「死の恐怖」については、高齢者の死に対する恐怖は低いという、青木（2000）、荒井（1994）、橋本他（1993）の報告を支持するものである。死の恐怖が全般的に高くない理由として、回答者の死に対する態度は、実際に死に直面した時の態度ではなく、回答時における感覚としての態度であることが考えられる。青木（2000）も調査における死に対する態度について、迫り来る死に対する意識とは一線を画すものであり、高齢者といえども死に対して一定の距離を保っている者の意識と捉えることが順当と述べている。本研究の対象者は、比較的健康状態が良好と考えられるが、死が目前に迫り、現実のものとして認識された時、死に対する態度が変化する可能性もあると考えられる。

また、DAP短縮版を用いて高齢者1,546名を対象に分析を行った針金他（2009）では「死の恐怖」に性差を確認しているが、本研究では有意差がみられなかった。これは、本研究の対象者が200名と少ないため、差が表れなかった可能性が考えられる。

性による差は「積極的受容」のみで認められ、

女性の方が男性よりも死後の世界に期待をもつことが示され、針金他（2009）や青木（2000）と同様の結果が得られた。しかし、得点自体は男女ともやや低めであり、死後の世界に期待をもつ傾向は全体的に低いといえる。その理由として、「積極的受容」の項目にみられる‘天国’の存在は西洋の宗教観に根差しており、わが国の宗教観とは異なることがあげられる。同様に、項目にみられる‘死後の世界’について、丹下（2004）は、日本人の死生観は苦難の多い時代には来世志向的であったが、庶民の生活が豊かになり、生きることを楽しむ余裕が出てきた近現代においては現世志向的になっていると指摘しており、これらのことが得点の低さに関連していると考えられる。

「中立的受容」については有意差が認められず、死を客観的に認識し、死の必然性を受容する傾向と人生の意味・目的意識の明確さ及び性別には関連がないことが示された。針金他（2009）では性差があることが確認されているが、本研究では有意差がみられなかった。これは「死の恐怖」と同様に対象者数の違いによるものと推察された。また、「中立的受容」は$\alpha = .44$と、尺度としての信頼性が低く、分析結果に影響を及ぼした可能性があると考えられる

２．人生における意味・目的意識と人生の目標

人生の目標については「目標なし」のみに群による差が認められ、人生の意味・目的が欠如している人は、目標をもたない人が多かった。また、人生の意味・目的意識がいくぶん不明確な人であっても、目標をもたない人は少ないことが明らかになった。Wrosch, Scheier, Miller, Schulz, & Carver（2003）は達成不可能な目標は断念し、新たな目標に挑戦することが精神的健康に良い影響を及ぼすことを明らかにしたが、新たな目標を見つけることが困難な高齢者については、目標の断念はネガティブな影響を及ぼすため、目標がない状態よりも、達成不可能な目標を維持し続けた方が良いと述べ、高齢者が目標をもつことの重要性を示唆している。また、目標があること自体が生へのポジティブな姿勢の表れと考えられ、人生の意味・目的意識がいくぶん不明確な群においても具体的な目標をもち、前向きに生活をしていることが示唆されたといえる。「目標なし」が多い不明確群については、具体的な目標をもち、目標に関与することが効果的と考えられる。

国内における高齢者の目標に関する研究は数少ないが、柏尾（2000）は、25歳未満では職業や達成に関する目標が多いが、加齢と共に健康を目標にする人が増え、75歳を過ぎると目標なしの人も多く、職業・達成、家族の幸福、人格の向上・生き方、健康といった目標内容はほぼ同列になると報告している。また、木村・内山（2010）は青年と高齢者の目標を比較し、大学生の目標は１位が仕事・職業と自己達成的であることに対し、高齢者は１位が健康、２位が趣味・余暇活動、３位が家族であったと報告している。健康や趣味・余暇活動は本研究における「情緒」に、家族は「統合的社会関係」などに該当すると考えられるが、目標内容に関するカテゴリーに有意差はみられなかった。今後は、さらなる知見の蓄積が必要と考えられる。また、目標にどの程度関与しているかを測定することによって差が検出されることも考えられるため、今後の課題としたい。

３．人生に対する態度

明確群と不明確傾向群ではポジティブな評価をする傾向が高く、‘個人内’と‘個人と環境間’との両方に対する評価が示されたが、不明確群ではポジティブな評価をする傾向が低く、‘個人内’のみの評価が示された。‘個人内’の「情緒」・「認知」は環境への働きかけを含まず、特に喜びや楽しみを得るといった「情緒」は個人で満たすことができる手段が多いと考えられ、比較的、ポジティブな評価や態度を得やすいと推察される。不明確群において、‘個人と環境間’に関する記述が確認されなかった一方、明確群では‘個人と環境間’の「自己主張的社会関係」と「統合的社会関係」に関するポジティブな評価や態度が示された。「自己主張的社会関係」は自分らしさに関わる領域であり、「統合的社会関係」は他者とのつながりに関わる領域であるといえる。これらは不明確傾向群においても確認されたが、明確群においてはより顕著に示され、生における重要な価値になっていると考えられる。

また、ネガティブな評価は不明確群に多く、不明確傾向群に少ないことが示された。両群には‘個人内’と‘個人と環境間’の両方に関する評価

が認められたが、不明確傾向群では「認知」が、不明確群では「情緒」と「自己主張的社会関係」に関するネガティブな評価や態度が示された。不明確傾向群については認知への働きかけを行い、後悔の念などがある場合は気持ちの整理を行うことなどが効果的と考えられる。不明確群では、喜びや楽しみを得ることや、自分らしさを表現する働きかけが人生の意味・目的意識をより明確にする一助になると考えられる。

V．まとめと今後の課題

生への価値観との関連から高齢者の死に対する態度について検討した結果、人生における意味・目的の明確さが異なる3群や性別による差が確認されたが、どの群も死の恐怖や現世からの回避を期待する傾向は高くないことが示された。また、死後の世界について積極的に期待をもつこともなく、死に対して比較的安定かつ現実的な態度を有していることが示された。

本研究では、DAP短縮版を用いた針金他（2009）に一致する結果と不一致な結果との両方が得られたが、わが国における高齢者の死に対する態度に関して一般的特徴を述べるには、さらなる研究の蓄積が必要と考えられる。また、配偶者との死別を経験した群との比較検討も今後の課題である。

注

1）本研究は、財団法人カシオ科学振興財団第28回（平成22年度）研究助成を受けて行われた。なお、内容の一部は第17回日本臨床死生学会大会で発表された。

引用文献

青木邦男（2000）．在宅高齢者の死に対する意識の構造と加齢による変化．山口県立大学社会福祉学部紀要，**6**，77-86.

荒井保男（1994）．老年期と死．荒井保男・星　薫（編著）．老年心理学．放送大学教育振興会，pp.174-196.

Diener，E.（2004）．Satisfaction With Life Scale Ed Diener　2011年4月5日 < http://s.psych.uiuc.edu/～ediener/SWLS.html>

Erikson，E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, E.H.（1986）. *Vital involvement in old age*. New York: W.W.Norton & Company.（エリクソン，E.H.，エリクソン，J.M. &キヴニック，E.H．朝長正徳・朝長梨枝子（共訳）（1990）．老年期生き生きしたかかわりあい　みすず書房）.

Ford, M.E.（1992）. *Motivating humans: goals, emotions, and personal agency beliefs*. London, New Delhi : SAGE.

Gessor, G., Wong, P.T., & Reker, G.T.（1987）. Death attitudes across the life span: Development and validation of the death attitude profile. *Omega: Journal of Death and Dying*, **18**, 113-128.

針金まゆみ・河合千恵子・増井幸恵・岩佐　一・稲垣宏樹・権藤恭之・小川まどか・鈴木隆雄（2009）．老年期における死に対する態度尺度（DAP）短縮版の信頼性ならびに妥当性．厚生の指標，**56**，33-38.

橋本篤孝・中村公美・柳井美香・横内敏郎・鶴田千尋（1993）．「死」に対する態度は加齢とともにどうかわっていくか．老年精神医学雑誌，**4**，51-58.

羽坂雄介・岡本祐子（2006）．過去のライフイベントの捉え方と生活満足度・将来展望・死に対する態度の関連．広島大学大学院心理臨床教育センター紀要，**5**，16-27.

Homes, T.H., & Rahe, R.H.（1967）. The Social Adjustment Rating Scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.

堀　薫夫（1996）．大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較．大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門，**44**，185-197.

石坂昌子（2009）．死の意味づけ尺度作成の試み　心理臨床学研究，**26**，734-740.

James, T.A., & Jeffrey ,B.V.（1996）. Goal Constructs in Psychology: Structure, Process, and Content. *Psychological Bulletin*, **120,** 338-475.

金児曉嗣（1994）．大学生とその両親の死の不安と死観　人文研究（大阪市立大学文学部紀要），**46**，537-564.

柏尾眞津子（2000）．高齢者の時間的展望　藤村邦博・大久保純一郎・箱井英寿（編著）．青

年期以降の発達心理学―自分らしく生き、老いるために―．北大路書房，pp.137-160.
河合千恵子・下仲順子・中里克治（1996）．老年期における死に対する態度．老年社会科学，**17**，107-116.
川島大輔（2005）．老年期の死の意味づけを巡る研究知見と課題．京都大学大学院教育学研究科紀要，**51**，247-261.
木村年晶・内山伊知郎（2010）．高齢者の人生目標に関する検討―青年との比較から―．同志社心理，**57**，23-31.
小谷みどり（2004）．死に対する意識と死の恐れ 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部ライフデザインレポート2004.5，4-15.
李　敏子（1990）．生，死，言葉，身体のイメージ―青年を対象として―．心理学研究，**61**，79-86.
森末真理（2003）．あなたと死―非医療従事者の死に対する意識調査―．川崎市立看護短期大学紀要，**8**，67-76.
森田真季（2007）．死生観とアイデンティティ，ストレッサー，コーピングとの関連　心理臨床学研究，**25**，505-515.
内閣府（2011）．平成23年度版高齢社会白書　内閣府　2011年12月20日 <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2011/zenbun/pdf/1s1s_1.pdf>（2011年12月25日）
PIL研究会（編）（1993a）．PILテスト日本語版システムパブリカ.
PIL研究会（編）（1993b）．PILテスト日本語版マニュアル システムパブリカ.
Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. (1977). Death and Personal faith: A psychometric investigation. *Journal of the Scientific Study of Religion*, **16**, 169-178.
杉山あけみ（1997）．死の不安測定―DAQの日本語版試作と検討―．中京大学文学部紀要，**32**，129-138.
田口香代子（2002）．高齢女性における配偶者喪失後の心理過程―死別前の夫婦関係が心理過程に及ぼす影響―．家族心理学研究，**16**，29-43.
丹下智香子（1995）．死生観の展開．名古屋大學教育學部紀要 教育心理学科，**42**，149-156.
丹下智香子（1999）．青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討．心理学研究，**70**，327-332.
丹下智香子（2004）．宗教性と死に対する態度．名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学，**51**，35-49.
辰巳有紀子（2000）．日本の高齢者における死の不安と死生観．聖心女子大学大学院論集，**22**，49-64.
Templer, D.I. (1970). The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, **82**, 165-701.
Wrosch, C., Scheier, M.F., Miller, E.G., Schulz, R., & Carver, C.S. (2003). Adaptive Self-Regulation of Unattainable Goals: Goal Disengagement, Goal Reengagemant,and Subjective Well-Being. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **29**, 1949-1508.

謝　辞

本稿の作成にあたり、調査にご協力頂いた皆様に心から感謝申し上げます。また、貴重なご意見とご助言を頂いた古川真人先生に厚く御礼申し上げます。

たぐち　かよこ（昭和女子大学生活心理研究所）
みうら　かなえ（昭和女子大学大学院生活機構研究科）